

れば心太だ怡ぶ、即ちその圖は雅信の命じた、いとも雅馴ならざる題號によつて暗示せらるゝ如く一箇の竹籠即ちかれらの巢を中心として五羽の兒雀を配したものであるが、別に一添景を加へざる爲めいたづら者の諸相は端的に眼に入る、南宋畫院流行の小幀がたとひ發生學的に考へて畫學生の試験課題にその端を發したとしても、畫面の小は必然に觀者の眼を近く誘ひ、當時花卉翎毛の描寫に試みられた特殊微細の注意を周圍に氣を散らすことなく心ゆく鑑賞せしむる長所をもつ。彫蟲の小技と言ふこと勿れ、南宋畫院の畫家達は好んでこの小畫面を借りつゝ時に精到無比の自然觀察を靈妙不思議の筆彩驅使に託し得たのである。看よ、この兒雀達も單に皮相の寫生でなく、寫實から入つていのちを生きて居る。おゝ可憐の生物よと畫面に吸ひ付けられた者はわれら以外南宋以後幾百千人あつたことだらう。或る者は一つが閉ぢ四つが開けた黄色い嘴を賞したであらう、或る者は此畫の命はつぶらに開いた眼だとも言つたであらう、か弱げな翼がと一人が言へば、いや、すべての翎毛の能手がさうであるやうに足がうまいのだ、脚々とまた一人のしたり顔の鑑畫家は傍輩を顧みたくも知れぬ。これらの評すべて當つて居る、しかも此畫の構圖の巧慧を忘れて、單に箇箇の形を可しとし、筆々の勢を優れたりとしたら、作家はわが苦心の酬はれざるを歎かすには居るまい。

げに巧慧の位置經營よ、圖の勢は對角線的に取られて居るが、この無形の線を貫くものに等しなみに開けられた三つの嘴がある、眼がある、頭がある。この三つの嘴眼頭の方角と意氣込みとはやがてその方向天の一角に當つて何事か起つたことを物語る、言ふまでもなく待ちに待つ親雀の出現である。巢の中の眞向きの一羽は既に好餌を得て満腹するか、固く嘴を閉ぢて知らず顔である、また一羽は三羽の兄妹の嘴打ち揃へて親呼ぶ聲に驚かされて、あたふたと地上より籠の縁に飛び上つたものの、なほ體勢を整へかねて、圓らな眼を一層睜つて、バタ／＼と翼を鳴らして居る。この満腹の一羽と慌てふためく一羽とのあらぬ方をむく顔と顔とが、その中間を貫いて對角線的に走る他の三つの顔を強調するのは言ふまでもないが、更にさながらにも籠縁にとまりかねたその一羽によつて籠の重心が突如破られ、こゝに例の對角線と相俟つて一畫の動勢が操

られるに至つたのは愉快である。この場合右方地上にイむ一羽の兒雀の足が籠の一部にかゝつて居ることがそれとなく覆らんとする籠に對する鎮の作用を爲すさへ面白きに、籠の中の平然たる眞向きの一羽によつて愈々安定感の加へらるゝも面白い。(また思ふ、この一羽は巢の動搖を氣にして居るとも思はれるが、何れにしても畫面構成上安定感に寄與する所あるは同じである)

宣和畫譜謂ふ所の雛雀圖様の一例にして噪雀圖を兼ね、更に母を畫外に畫いた一種異體の子母雀圖として味へば味ふ程此圖の味は深い。眞の筆者は知らず、この聲ある如き一圖によつて其名をわが藝苑に謳はるゝ宋汝志あはれ。(協本)

## 八、九 久隅守景筆 夕顏棚納涼圖

東京 伯爵 牧野伸顯氏藏

二曲屏風一隻 紙本淡彩 竪一・五三米 横一・六八米

夕暮の一時。粗いてゝらを着た男は腹這ひになつて筵を通す土の冷かさを樂みながら、敷物を撃つて拍子取りつゝ、一くさりの歌を口吟んでゐるらしい。今し夕餉の後を片付けた女は月に促がされて二布ばかりの構はぬ姿のまゝ厨から出て來てこの水入らずのまとぬに加はつたのであらう。一瞬の姿態を捉へて能く情景の眞に迫るもの、實に守景作品中の優に推す事が出來やう。圖を構ふる事簡淨、賦彩亦冲淡、夕空を表はすに淡墨を布き、團々たる月は白く素地のまゝに抜き、屋蓋、扁鬮、敷藁、竹竿に淡墨と淡赭を併せ用ひ、胡蘆は濃淡の墨を以て軽く揮洒し、葉の蟲蝕を表はすに淡き藍墨を點じてゐる。人體の表現は落筆草々たる如くして、而も愼密なる用意を示し、男の肉身を描く磊落な線と、女の腕に見らるゝ稍速度のある流麗な描線とは微妙な對照を見せ、尙細かに觀察すれば、男の肉體には淡赭の、女の肉身には薄紅の括りを用ひてその量感を豊富ならしめてゐる。その他てゝらの地の巧みな描寫と言ひ、衣紋の線に於ける狩野派の通弊たる無意味な屈屈さを脱した自然的な抑揚と言ひ、すべて中心の三人物に精を凝して他の點景を草略に描き去りたる、その構圖の妙と、運筆の冴と相俟つて意の適く所筆之に従ふの概がある。圖版によつても指摘し得る如く童子の左肩より頭髮の一部を切斷して上部に細長き約十二三厘の補紙

があり、従つてその部は後世の補筆と知るべく、この補紙より右に女の前額部

(原 寸)

を切る一線と、男の腹部より下へ敷莫塵の端に及ぶ一線の大きな斷爛を認める。但しこの部分には補彩なきものゝ如く、全面蠹蝕多く、その最も甚しき部分には多少筆を入れた形迹を認め得るがかくの如き小疵は敢て畫品を傷けるに足らず、些か畫面の荒れたるを惜むも、清雅掬すべく、畫裡萬斛の涼を盛る一佳品と言ふべきである。

久隅守景は神足常庵、桃田柳榮、緒方仲由等と相並んで探幽門下の四天王と謳はれた逸足であり、畫名天下に藉甚し、時にその畫品は探幽の上にあるとさへ評された事は三曉庵主談話によりて知る事が出来る。又古畫備考に従へば夙く探信門下の吉田某の如き、守景の偽作を製して市に鬻いだと傳へられ、以てその畫の如何に當時より寶重され來つたかを察知する事が出来る。しかもその畫蹟多からざるに非ず、その畫品清高ならざるに非ず、我が近古畫史の上に重要な一項を占むべき此畫人の傳記は杳として詳にし難い。生地歿年共に知り難く、行實の如きも一時加賀に住した事ある由を傳ふるのみである。在世年代も固より確知し得ないが、古畫備考に引ける木挽町公用帳に載せたる元祿四年狩野三家連署の願書を信用すれば、元祿四年より二十年以前に已にその子彦十郎が恐らくは二十歳前後に達して居たらしく思はれるからして、若し守景が人壽を全うしたのならば寛文、延寶の頃を盛りに過したと考へらるゝであらう。

一説に守景蚤世とあり、又一説に七十比の行年を記した畫蹟を止めてゐるとも言はれてゐるが、管見の及ぶ限り守景の落款には本圖に署せる如く單に守景筆とのみあるものが最も多く、その行年を記した作品なるものゝ信據すべきものを知らない。従つて蚤世長壽れとも定め難いが、その畫蹟より想像する所で

は、恰かも本圖の如き、最も渾熟せる筆致を示し、老成の風を見得る所からして、相當の壽を享けたるものと考へ得らるゝのではあるまいか。

探幽と守景との比較は興味ある問題とし得る。その畫壇に於ける勢力と、その作畫の豊富に於て、守景は固より探幽の敵ではない。探幽の多方面な畫才も亦守景の能く追隨し得る所ではない。然もその畫品に至つては如何。探幽の作畫態度には常に御用繪師としての有形無形の束縛が加へられてゐたと考へられる。探幽の作品に陳腐な畫題が多く、新奇な獨創的構圖の見難い事はこれを物語るものであらう。之に比すれば守景の作畫態度には遙かに自由な、従つて遙かに獨創的なものを見得る。例へば本圖の如き畫題も、後世に至つては復古大和繪派の諸作家等の好んで採つた題材ではあるが、當時の狩野畫系に於てかゝる純日本的な、又庶民的な題材を取扱つた事はその一端の現れとすべきであり、或は狩野派に於て屢取扱ふ耕作圖の如きにあつても、古法眼以來の諸作家が好んで漢風を描く所を、守景はそこにも矢張り純日本的な優れた一風俗畫を描出してゐる。此意味に於て探幽と守景の關係は恰かも高雄觀楓圖や、花下遊樂圖を遺した古狩野末流の諸家と元信等宗家の嫡流諸家との關係に類似するものがあり、その畫品に於ても古狩野末流の作家のこれらの作品が、時に却つて宗家の大家を凌駕するものがあるが如く、守景の作品も、その上乘なるもの本圖の如きに至つては、陳々相依る探幽の凡作を擯づる事數等と評して敢て溢美ではあるまい。(正木)

## 十 下村觀山筆 天心岡倉先生像

東京美術學校藏

掛幅紙本淡彩 竪一、三八〇米 横〇、六八八米

此圖は大正十一年秋の日本美術院創立二十五週年に相當する再興第九回展に出品された「天心先生」の草稿で、之が製作されたのは同年春の事であると云ふから岡倉氏歿後(大正二年九月二日五十二歳で病歿)約十年後の製作であり、従つて勿論臨寫ではない。